

# 武蔵国分寺跡北西地区の遺跡

西国分寺地区(旧国鉄中央鉄道学園西側跡地)  
住宅市街地総合整備事業に伴う  
平成6年度発掘調査概報



1995

西国分寺地区遺跡調査会



## はじめに

本調査は、西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）の住宅市街地総合整備事業に伴い、国分寺市から委託を受け実施しているものです。当該地区に埋蔵文化財が遺存していることは、東京都遺跡地図や平成3年に国分寺市教委によって行われた試掘調査結果で既に明らかにされています。

埋蔵文化財は、他の有形・無形文化財と共にわれわれ国民の共有財産であり貴重な歴史的・文化的遺産です。遺跡の発掘調査は、このような文化財を大切に保存・記録し、後世の人々に伝えていくと云う理念のもとに行われています。また、このことは、わたしたち現代社会に生きるものの責務であると思います。

今年度の調査は、平成8年度までの4か年計画の2年目に当たり、全調査対象面積6.7haの内、南東部の2.25haを対象に実施しました。結果は、推定東山道の側溝部での新旧2条の溝跡の検出、縄文時代早期の集落の一端を窺わせる調査区北端で検出された撚糸文期の竪穴住居跡、旧石器時代に属する尖頭器やナイフ形石器の検出等々、新たな知見を数多く得ることが出来ました。

本書は、平成6年度の調査概要を示したものです。遺跡全体の詳細な検討については今後の調査に委ねるところですが、武蔵野台地の歴史に新たな一頁を加えると共に、地域の方々に埋蔵文化財に対する関心と理解を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、調査の実施にあたり多大なご理解とご協力をいただきました国分寺市開発二部の方々をはじめ関係各位の皆様、調査を御指導いただきました坂詰秀一先生をはじめとする調査団の方々、その他調査にご理解とご協力をいただいた地域の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成7年4月15日

会長 柴崎正次

## 序

武蔵国分寺跡の西北方に位置する西国分寺地区の調査は2年次を迎えた。本年度の調査対象面積は22,520㎡余であった。それはあたえられた総面積67,561㎡余のおよそ3分の1に該当する。

発掘の結果、旧石器時代後期の石器13点、縄文時代早期の竪穴住居跡1軒のほか集石遺構・土坑、歴史時代の道路跡などが検出された。

旧石器時代の遺物は、Ⅲ・Ⅳ層中に含まれ、調査地の北域に見出された。すでに知られていた石器の出土層位が確認されたこと、縄文時代早期の集落形成の空間的なあり方が改めて把握されたことは注目されよう。縄文時代早期の稲荷原式土器を出土した竪穴住居跡の検出は、調査地域の北方にその時期の集落が展開していたことを示している。また、中期の集石遺構の検出は、周辺に中期の集落が形成されていたことを物語る資料として注目されることになった。

このように石器時代に属する遺構の検出、遺物の出土が明らかにされたことは、この地域におけるそれぞれの時代の人類居住の状態を知る片鱗が明らかにされたのである。

歴史時代の遺構については、すでに確認調査の結果を踏まえて推定古代東山道の道路跡が、調査地域の東方に南北に走っていることが予期されていた。東・西に側溝をもつ道路跡は、溝の心々約12mを有し、すでに知られているものと同様の状況を示していた。側溝の状態は、2回以上の掘削の痕跡をもち、敷設以来、それが補修されたことを暗示している。補修が行われたことは、推定古代東山道の公道機能の時間的な下限、換言すれば、官道としての東山道のあり方を考えるときに一つの拠り所をあたえている。かかる点についての追及は、明年度以降に実施される予定の側溝調査に期待されるのである。

以上のごとき結果をえた第2年次の調査は、決して華々しいものとは言えないが、武蔵国分僧・尼寺の中間地域を南北に走る推定古代東山道の北の延長部分を発掘し、それが側溝を伴うことを明らかにすることができたことは重要な成果であった。加えて、旧石器時代後期並びに縄文時代早期・中期の遺跡の存在が確認され、すでに知られてきた周辺の遺跡のあり方に資料を追加することができたのである。

広大な面積を対象とする本調査事業を完了させるため、調査に従事する一同、現実にそくした調査方法の検討を積み重ねながら、所期の目的を達成させるため努力を傾注している。関係諸機関諸氏のご協力とご理解を願ってやまない。

平成7年4月15日

団 長 坂 詰 秀 一

## 例 言

1. 本書は、西国分寺地区住宅市街地総合整備事業に伴う平成6年度発掘調査概要報告である。
2. 本調査区は、東京都国分寺市泉町2丁目1番地（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）に所在する。
3. 調査は、国分寺市役所開発二部、東京都住宅局、東京都住宅供給公社、住宅・都市整備公団の委託を受け、西国分寺地区遺跡調査会が実施している。
4. 本書の編集・執筆は、坂語秀一団長の指導のもとに持田友宏参与・早川泉参与の助言を得て、板野晋鏡・伊藤俊治・小林定之が行った。尚、執筆者名は文末に記した。
5. 本書の挿図・図版の作成は、概報制作班（渡辺淳子・田口直美・畑守みどり・司東順香・飯島明美・大井史）が行った。
6. 本書の内容は、平成7年3月31日に於ける整理段階のものであり、遺構・遺物は、主だったものを選出して掲載している。
7. 発掘調査および本書の作成にあたって、下記の方々や諸機関より御指導・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。

有吉重蔵・近藤滋・福田信夫・上数領久・上村昌男・河内公夫・西野善勝・杉浦由恵・小川将之  
東京都教育委員会・国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会・都立府中病院内遺跡調査会・  
都宮川越道住宅遺跡調査会・武蔵国分寺関連遺跡調査会  
株式会社こうそく・加藤重機建設株式会社・白木建設株式会社・榎大蔵土木・榎富士金物

## 凡 例

1. 遺構番号は下記の略称を冠し表記している。

SI	—	住居跡	SF	—	道路状遺構
SS	—	集石跡	SX	—	特殊遺構
SK	—	土坑跡	P	—	小穴
SD	—	溝跡			
2. 全体図・遺構配置図のグリッド線に付した数字は、座標原点からの距離を表わしている。
3. 遺物写真に付した番号は、図上の出土位置に付した番号に対応している。



▲ 調査風景（北から）

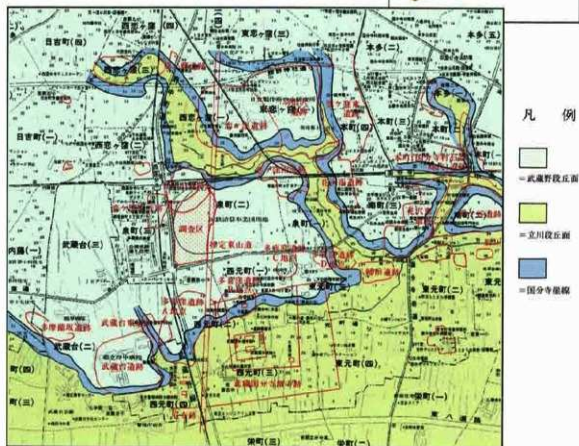
## 目 次

はじめに	表紙 2
序	1
例言・凡例	2
目次	3
I. 遺跡の環境	4
II. 調査方法・層序	5
III. 旧石器時代の調査	6
IV. 縄文時代の調査	8
V. 歴史時代の調査	18
あとがき	23
調査団名簿	24
報告書抄録	表紙 3

## I. 遺跡の環境

本調査区は、JR中央線国分寺駅の南東、東京都国分寺市京町2丁目1番地に所在し、北方に野川の開析谷である恋ヶ窪谷、南方には国分寺崖線を臨む武蔵野段丘面上に立地しており、標高は約79メートルである。南方の崖線下（立川段丘面）には南北約1.5km、東西約2kmの広がりを持つ国指定史跡「武蔵国分寺跡」があり、当該地はその北西部地区に含まれている。

北方の恋ヶ窪谷や南方崖線下には数々の湧水地が在り、特に崖線下の「真姿の池」から湧き出る水は、全国名水百選にも選ばれており、他の湧水と共に野川の源流となっている。この自然環境に恵まれた野川源流域には、下図に示すとおり数多くの著名な遺跡が分布している。古代「武蔵国分寺跡」はもとより重文指定の勝飯式土器で有名な多喜窪遺跡、縄文中期の集落跡の恋ヶ窪遺跡、旧石器時代の多数の文化層が確認されている武蔵台遺跡・多摩蘭坂遺跡、本調査区の東端を南北に通過している古代推定東山道跡、現府中街道西側の旧鎌倉街道跡等々があり、この地域は、太古の昔より現在に至るまでの間、人々の生活・文化が連続と続いている場所でもある。（板野 晋銭）

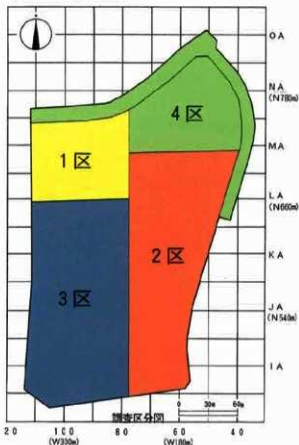


調査位置と周辺の遺跡

## II. 調査方法・層序

### 調査方法

1. 全調査対象地区を4区に区分し、それぞれ年度毎に調査する事とした。
2. 平成6年度は、2区(右図)を対象に調査を実施した。面積は、22,520.64㎡である。
3. 表土は全て機械掘削とし、包含層の掘削は手掘りで行った。
4. グリッドは、国分寺市遺跡調査会で設定した僧寺中軸線中心点を座標原点とする、最小単位が3×3mのグリッドを使用している。方位は、南北中軸線に対し真北が7°08'03"、磁北が0°38'03"それぞれ東偏する。
5. 遺構確認は、縄文時代=Ⅲ層上面、奈良平安時代=Ⅱ層上面で行った。
6. 包含層出土の遺物は、全点出土位置を記録した。
7. 写真による記録は、モノクロ・リバーサルフィルムで適時行った。



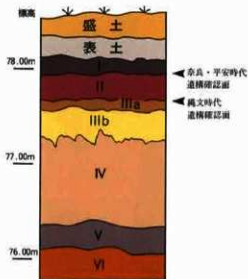
調査区分図

凡例 1区 2区 3区 4区

### 基本層序

本調査区は、武蔵野段丘面上に位置しており、地層は、礫層を基盤に武蔵野ローム・立川ローム・褐色を基調とした遺物包含層・表土層の順に堆積している。

- 盛土 鉄道学園造成時の盛土。  
 表土 明灰褐色土。しまり弱く、粘性は少ない。  
 I層 黒褐色土。粘性が少なく粒子が粗い。  
 II層 暗褐色土。しまり粘性ともに強い。縄文時代の遺物包含層。  
 IIIa層 明褐色土。ローム漸移層。  
 IIIb層 褐色ローム。(ソフトローム)  
 IV層 褐色ローム。(ハードローム)  
 V層 暗褐色ローム。立川ローム第1黒色帯。



基本層序模式図

### Ⅲ. 旧石器時代の調査

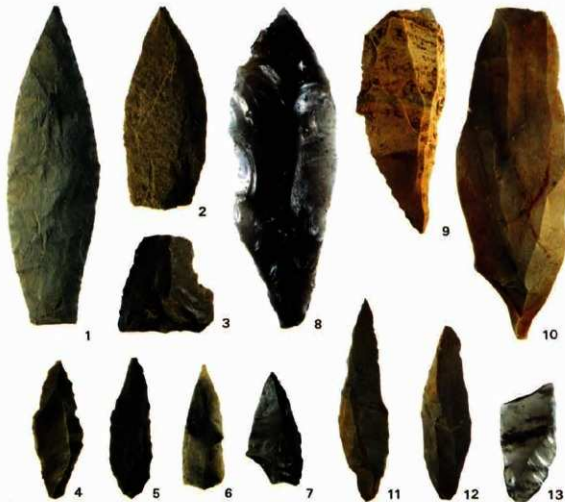
旧石器時代の調査は、区内に9×9mの調査坑を数ヶ所設け掘削をし、遺物・遺構が確認された場合は随時拡張をして発掘をする方法をとった。11月24日、北側に設定した調査坑から掘削を開始した。3月31日現在に於ける調査箇所は16ヶ所、調査面積は2,007㎡、全体の約9%に及んでいる。



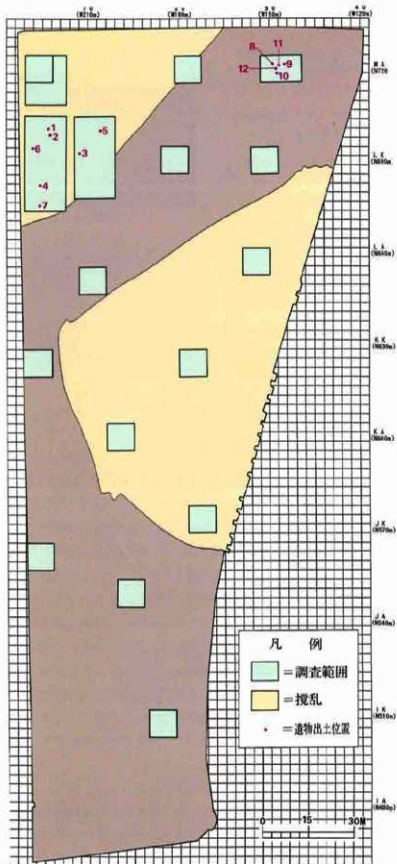
▲ 調査風景

**調査結果** 鉄道学園跡地に於ける当該期の遺跡の存在は、平成3年に実施された試掘調査の結果、明らかにされており、本調査区の北東の位置からナイフ形石器・剥片等が出土している。また、前年度の調査区（1区）からも、尖頭器・ナイフ形石器・剥片等がⅢ・Ⅳ層から出土しており、今年度調査区（2区）からも遺物の出土が十分予想された。

調査の結果は、調査区北側に設定した調査坑を中心に尖頭器・ナイフ形石器・剥片等が計13点出土した。下写真No.1～12はⅢ層から出土、No.13はⅣ層から出土している。（板野）







調査範囲・遺物出土位置図



▲ 北壁部土層断面



▲ 遺物出土状況



▲ 遺物出土状況



▲ 西壁部土層断面

## IV. 縄文時代の調査

縄文時代の調査は、6月27日、歴史時代の調査が終了した調査区南側から包含層の掘削作業を始め、終わった所から随時遺構確認・遺構調査を行い、2月3日すべての工程を終了した。

**調査結果** 確認された遺構は、住居跡1軒・土坑154基（内陥し穴13基）・特殊遺構16基・小穴1,070個である。SI-1は、出土遺物等から縄文早期の住居跡と思われる。北壁沿いで検出されており、来年度調査予定（4区）である北側への集落の広がりが見込まれる。SX-61は、現段階では特殊遺構としているが形状及び底面や周辺部で検出されたピット等から住居跡である可能性が高い。

表土・I層・II層中から出土した遺物は、土器約1,600点、石器約180点である。土器は中期が主体をなし、早期が北側の遺構から若干出土している。



▲ SI-1調査風景 (南から)



▲ SX-61調査風景 (南から)



▲ SI-1完掘状態 (北から)



▲ 土層断面 (南から)

### SI-1

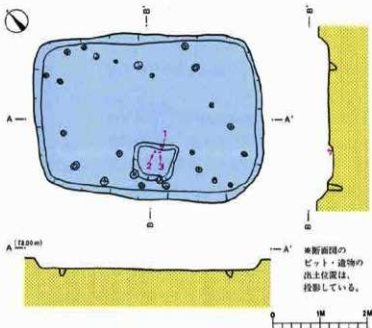
本住居跡は、調査区北壁沿いのLT-63・64グリッドに位置する。III層上面において検出され、遺存状態は良い。

形状は長軸4.7m・短軸3.5mの隅丸長方形で確認面からの深さは0.2mを測る。壁は、全面ともややなだらかに立ち上がっている。床面は、全体的に平坦で硬化面は確認出来なかったが、壁際を中心に径6～18cm・深さ6～36cmほどのピットが26個検出された。南壁中心部から20cm程の位置に、長軸90cm・短軸75cm・深さ10cm位の堀り込みが検出され、炉跡と思われたが焼土及び炭化物は確認できなかった。覆土は大きく3層に分かれII層土を主体とした自然堆積と思われる。

遺物は、土器が住居覆土から6点、堀り込みから7点出土した。堀り込み内の土器は撫系文采の稲荷原式土器であり、これにより本住居跡は縄文早期に構築されたものと推測される。



▲ 遺物出土状況



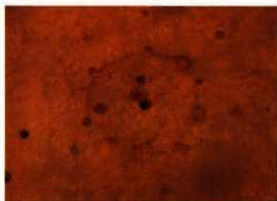
SI-1実測図

## SX-61

本遺構は、調査区北側LK-52・53グリッドに位置する。遺存状態は良く、III層上面において検出された。

平面プランは径約2.6mの円形で確認面からの深さは0.16mを測る。壁はなだらかに立ち上がっている。底面は、全体的に平坦だが硬化面は検出されなかった。本遺構はビットが多く、底面に4個、壁沿いに10個、周囲に7個の計21個が検出された。底面中央ビットは、径30cm・深さ50cmの規模を呈する。壁沿いビットの大半は径20cm程で、深さも8～20cm位である。周囲のビットは、径14～26cm程で深さは8～16cmを測る。覆土は2層に分かれ、上層はII層土が、下層はソフトロームが主体で壁際から中心に向かってなだらかに堆積している。遺物は土器片及び黒曜石片が数点出土した。

本遺構は、形状及びビットの配列からして住居跡と思われるが確定はできなかった。今後の検討を待ちたい。



▲ SX-61完掘状態 (東から)



▲ 土層断面 (南から)

### SS-3

本集石は、調査区北側LG-58・59グリッドにおいて検出された。中心部は歴史時代の土坑により削平されている。

礫はII層上面に楕円形に分布し、密集部分は中心よりやや西側に位置する。大半は破砕礫で、赤化したものが多い。密集部周辺に縄文中期の土器片が2点散在していた。集石下に土坑は検出されなかった。



▲ SS-3全景 (南から)

### SS-4

本集石は、調査区北東部LM-48グリッドに位置する。遺存状態は良く、II層中程において検出された。

礫は密集しており、あまり散乱していない。大半は破砕礫で、被熱によるものと思われるが、部分的に黒色化した礫や赤化した礫が多い。中心付近に土器が1点出土したが、小片のため時期は不明である。



▲ SS-4全景 (北から)

### SK-277

本土坑は、調査区北壁近くのLT-69グリッドに位置し、III層上面において検出された。

遺存状態は良く、平面プランは長軸2.4m・短軸1.7mのやや丸みを帯びた長方形で、確認面からの深さは0.7mを測る。南壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、北壁及び東西壁は深さ20cm程がなだらかに傾斜している。底面は平坦で、長軸1.9m・短軸1.0mの長方形を呈する。覆土は半層で、II層土が底面まで堆積しているが、壁際はソフトロームが流れ込んでいる。底面中央部にビットが3個、長軸方向に並んで検出された。ビットは、地山を断ち割って調査をしたが、この断面により、中央ビットは径20cm・深さ60cmの規模を有し、左右ビットも径12cm・深さ50cm程の規模を呈することが確認された。

本土坑は、土坑自体の規模と底面に3個並んで検出されたビットの位置・規模・形状などを検討したが、その性格を確定することはできなかった。今後の課題としたい。



▲ SK-277完掘状態 (西から)



▲ 断面ビット検出状態 (西から)

## SK-127

本土坑は、調査区南東角のHR-81グリッドに位置する。III層上面において検出され、遺存状態は良い。

平面プランは長軸2.1m・短軸1.4mの楕円形で確認面からの深さは1.2mを測る。壁は、全壁とも深さ50cm位まではなだらかに傾斜しているが、それより下はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦で、長軸1.0m・短軸0.4mの長方形に近い形状を呈する。底面中央部分に集中して径3～6cm・深さ50～70cmのビットが11個検出された。覆土はII層土を主体とするが中層にはソフトロームが多く混入している。

本土坑は、規模・形状からして陥し穴と思われる。



▲ SK-127完掘状態 (東から)



▲ ビット検出状態 (東から)



▲ SK-459完掘状態 (西から)



▲ ビット検出状態 (東から)

## SK-459

本土坑は、調査区北側LF-57グリッドに位置する。III層上面において検出され、遺存状態は良い。

形状は長軸1.6m・短軸1.2mの楕円形で確認面からの深さは0.9mを測る。壁は深さ40cm位まではなだらかに傾斜しているが、それより下は垂直に立ち上がっている。底面は平坦で、長軸1.4m・短軸0.5mの長楕円形を呈し、長軸中心部はややくびれている。底面中央やや北側と、南壁から20cmの所にビットが検出された。覆土は4層に分かれII層土が主体で自然堆積と思われる。本土坑も規模・形状から陥し穴と推測される。

## SK-270

本土坑は、調査区北壁近くのLT-54グリッドに位置する。上部が削平されていたためIV層上面より検出された。

平面プラン及び底面の形状は長方形で、長軸・短軸共に直線的で隅も直角に近い。規模は長軸1.4m・短軸0.6mで確認面からの深さは0.7mを測る。東壁はやや内側に湾曲し、南壁は底面近くが僅かにオーバーハングしているが、西壁と北壁は垂直に立ち上がっている。底面は平坦で、径8cm・深さ20cm程のビットが5個検出された。覆土は、II層土が主体で自然堆積と思われるが、各層の違いは微妙で比較的短期間に堆積したものと推測される。本土坑も陥し穴であると思われる。



▲ SK-270完掘状態 (西から)



▲ ビット検出状態 (西から)

## SK-273

本土坑は、調査区北側LC-69グリッドに位置する。上部が削平されていたためⅢ層中程より検出された。

平面プランは、長軸1.9m・短軸0.4mの長楕円形で南北方向に長軸を持ち、確認面からの深さは0.6mを測る。東西及び北壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、南壁は底面近くがややオーバーハングしている。底面は平坦で、南壁から40cm程の所に径6cm・深さ14cmのビットが検出された。覆土は大きく3層に分かれ、上層及び下層はⅡ層土が主体だが、中層20cm位はソフトロームが主である。本土坑は、規模及び形状より所謂Tビットと称される陥し穴であると思われる。



▲ SK-273土層断面 (東から)



▲ 半截完掘状態 (東から)



▲ SK-274土層断面 (西から)



▲ 半截完掘状態 (西から)

## SK-274

本土坑は、調査区北側LG-67グリッドに位置する。北側一部と上部が削平されていたためⅢ層中程より検出された。

形状は、南北方向に長軸をもつ長楕円形で、断ち割り断面より長軸は2.6mと推定される。短軸は0.4mで、確認面からの深さは0.6mを測る。東西壁はほぼ垂直だが底面近くはわずかに湾曲している。南北壁は大きく湾曲しており、断ち割り断面は弓なりを呈する。覆土は大きく4層に分かれ、Ⅱ層土が主体だが中層にはソフトロームが多く混入している。本土坑も、Tビットと称される陥し穴であると思われる。



▲ SK-245完掘状態 (南から)



▲ 土層断面 (南から)

## SK-246

本土坑は、調査区南側IF-73グリッドに位置する。Ⅲ層上面において検出され、遺存状態は良い。

平面プランは、径約1.2mのほぼ円形で確認面からの深さは0.7mを測る。壁面は深さ0.4m位まではなだらかに傾斜しているが、それより下はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦で、長軸0.7m・短軸0.5mの楕円形を呈する。覆土は大きく4層に分かれ、西壁よりに崩落と思われるソフトロームの流れ込みがある他は、Ⅱ層土を主体とした自然堆積と推測される。

本土坑の性格は、出土遺物もなく明らかでないが、土壌サンプルを採取しているのでこの分析結果を待ちたい。(伊藤俊治)

出土遺物



S = 1/1



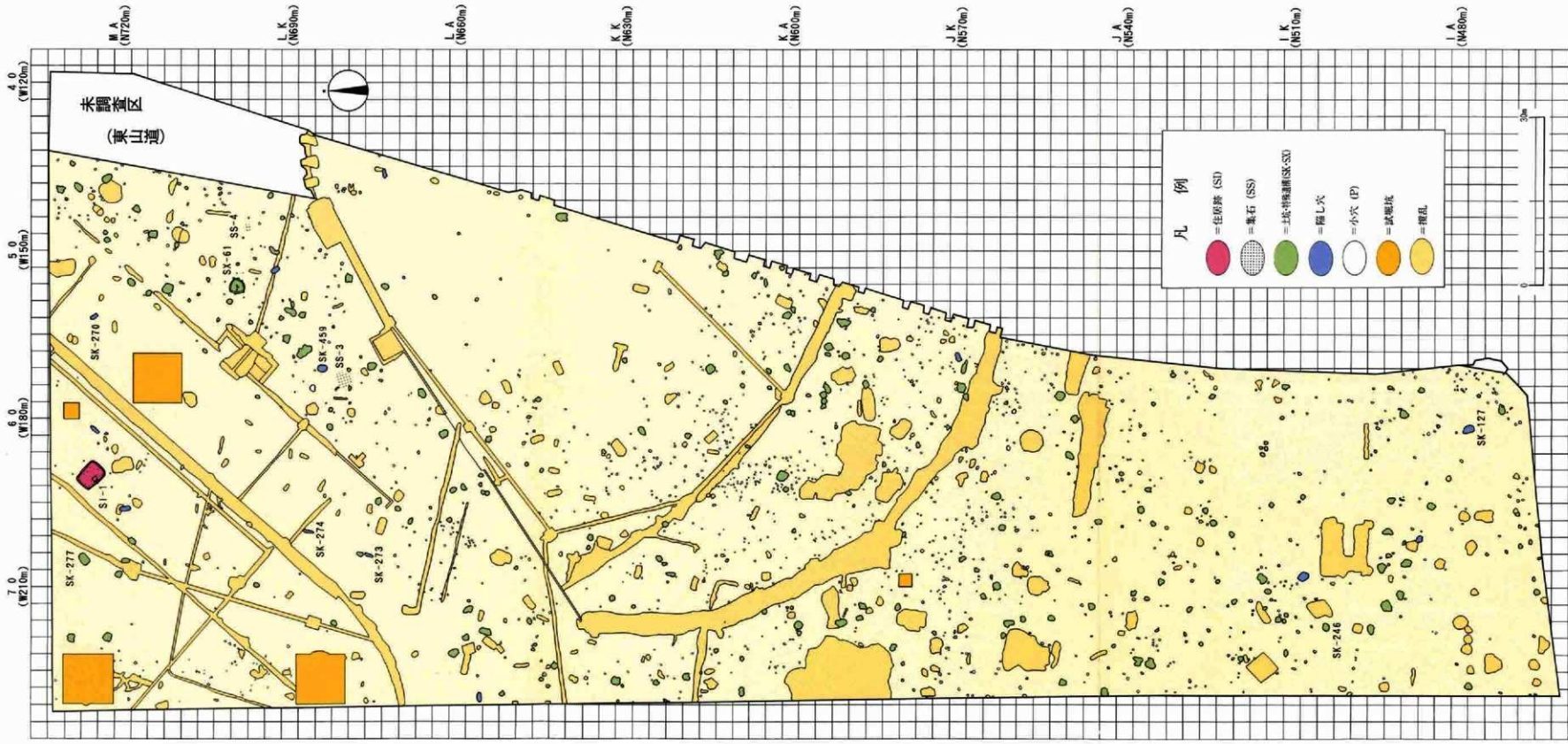
S = 1/2



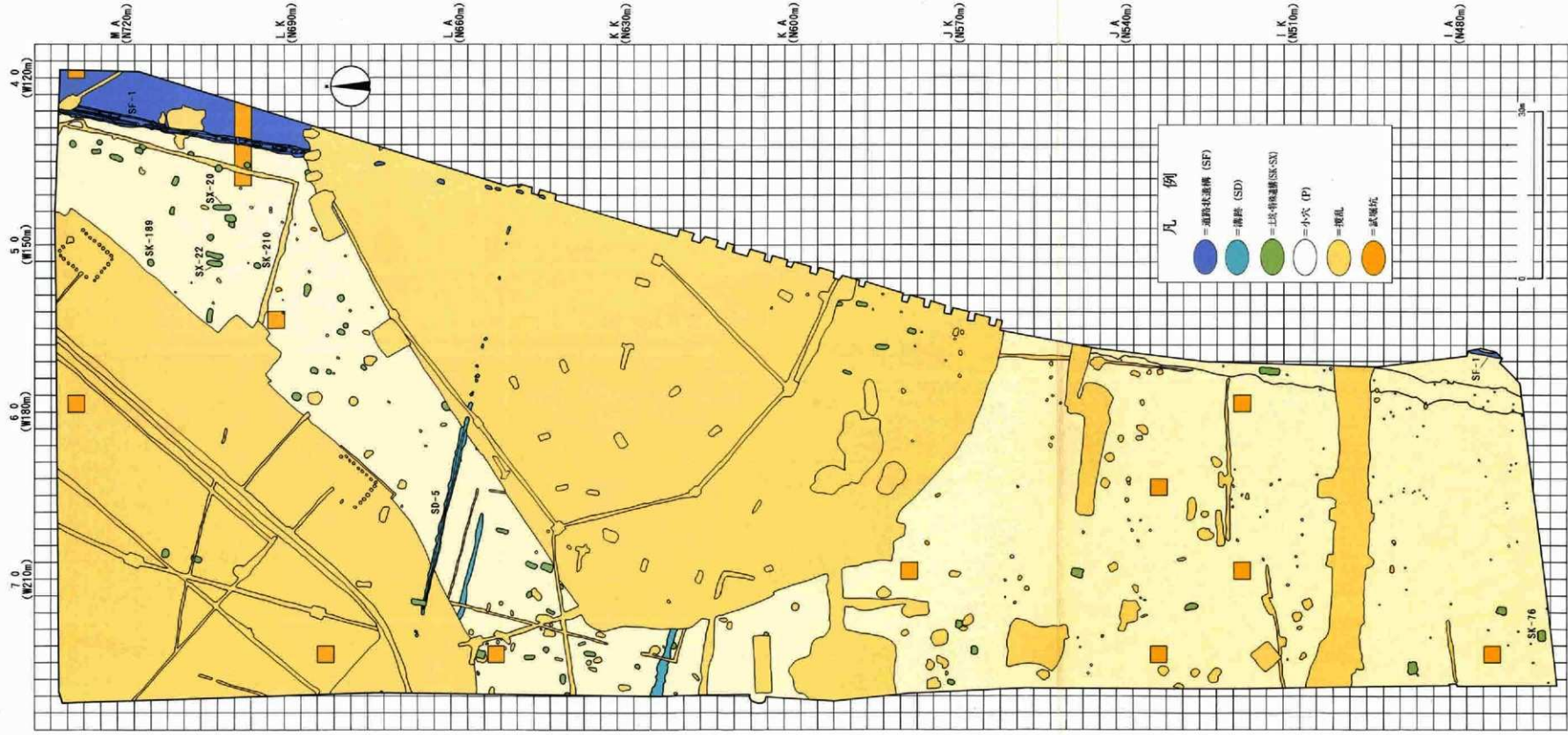
S = 1/4







縄文時代遺構配置図



歷史時代遺構配置圖



▲ 歷史時代遺構完掘狀態全景

## V. 歴史時代の調査

4月22日、調査区南端部から包含層掘削・遺構検出作業を開始した。順次北側へと調査を進めて行き、9月26日、空中写真撮影を行い、10月18日、当該期の調査工程を終了した。

**調査結果** 検出された遺構は、道路状遺構1本、溝跡17条、土坑190基、特殊遺構31基、小穴300個である。



▲ SF-1調査風景 (南から)



▲ 調査風景

SF-1は、詳細は後記するが平成3年に実施された試掘調査の際に確認されている推定東山道跡である。SD-5は、前年度調査でも確認されており、調査区を東西に横切る溝跡である。土坑は、その形状から円形土坑と方形土坑に分類出来る。円形土坑は主に調査区北東部のSF-1の側溝の西側で検出されており、用途は不明であるが、時期は覆土からすると奈良平安期のものと思われる。方形土坑は、奈良平安期のものと中世以降のものに分類出来、調査区の南側には奈良平安期の土坑が多く、北半分には中世以降の土坑が多く分布している。

調査区の南側には奈良平安期の土坑が多く、北半分には中世以降の土坑が多く分布している。

### S F - 1 (道路状遺構・推定東山道跡)

推定東山道は、心々距離約12mの東西両側溝を伴う道路状遺構である。平成3年に行われた試掘調査の結果、推定ラインが、調査区東端を南北に通している事が明らかにされている。

本年度の調査対象地区(2区)には、北東部に遺構の西半分側の南北約100mが、南東部角に西側溝約10mが含まれている。遺存状況は、北から約50mの部分まではほぼ良好であるが、その南側は既存の野球場により大きく削平されており、側溝の深く掘り込まれた部分が点在するのみであった。

調査の結果、西側溝部には新旧2条の溝(便宜上A溝、B溝)が検出された。南半分側では、A溝はB溝が埋まった後にほぼ同じ位置を掘り込んで構築している様子が、土層断面から窺えた。A溝は、北に行くにつれ東にずれてゆき途中からは完全に2条に分かれ並行している。また、調査区南東角で検出された側溝部でも同様の新旧2条の溝が確認されている。

B溝は道路構築当初の溝だと推定されるが、A溝の構築時期についての検討は来年度調査予定の東側半分及び北側の調査結果を待ちたい。路面部は最終面までの調査は行わなかったが、場所によっては硬質面がブロック状に検出されている。(板野)



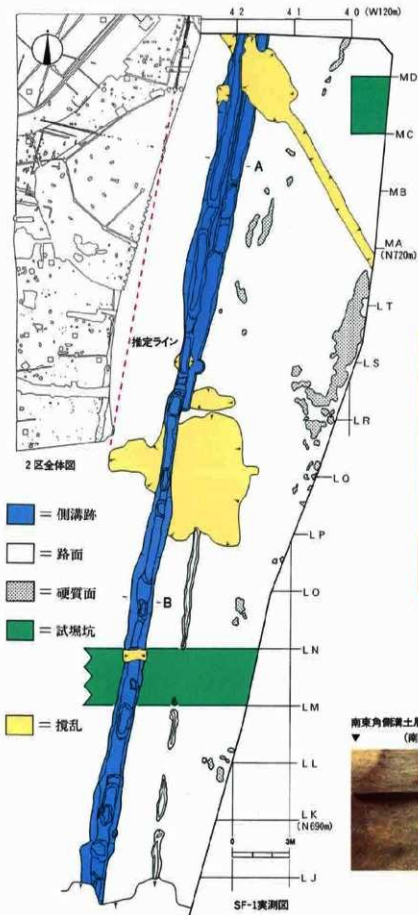
▲ 全景 (北から)



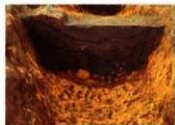
▲ A溝  
検出状態  
(南から)



▲ B溝  
検出状態  
(南から)



▲ A地点土層断面 (南から)



▲ B地点土層断面 (南から)



▲ 全景 (南から)

南東角側溝土層断面 (南から)



▲ 南東角側溝完掘状態 (南から)

## SD-5

調査区中央やや北側を東西方向に走る。検出位置、方向、形状より、1区にて調査されたSD-5の延長と同一と確認された。西側は削平により1区までの間が確認できなかった。東側は野球場により削平されているが、かろうじて底面の痕跡が飛び飛びに確認された。中央部も遺存状態はあまり良くないが、状態の良い位置で、上面幅1.3m・底面幅0.4m・確認面からの深さ0.5mを測る。覆土は黒褐色土主体の自然堆積層である。

今年度の調査では、調査区東壁にて、SF-1の西側溝と交差する部分が発出されたが、ともに遺存状況不良のため、切り合い関係は判明しなかった。また、本溝の性格は、2区に於いても明らかにならなかった。SD-5はまだ東へ延びると思われ、SF-1との関係も含めて来年度に期待したい。今年度は約80m(1区と合せて約130m)確認された。

土層断面  
(東から)



土層断面  
(東から)

### 凡 例

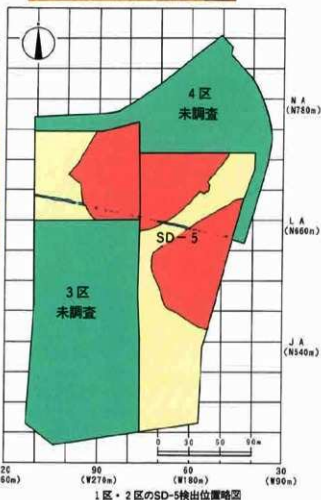
- SD-5
- 攪乱
- 未調査区



◀1区のSD-5  
完掘状態  
(東から)



◀2区のSD-5  
完掘状態  
(東から)



## SK-76

調査区南西南壁寄り、HM-74グリッドに位置し、II層上面に於いて確認された。調査区南側部分は耕作により削平されており、上面以外の遺存状態は良好である。

形状は、長軸を東西方向に持つ方形を呈し、長軸2m・短軸1.4m・確認面からの深さ0.55mを測る。壁は四方ほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦な方形で、一部木の根による攪乱を受けていた。覆土は基本的に3層に分かれる自然堆積層である。上1層は黒褐色土主体で、下の2層は暗褐色土と黒褐色土の混合土で中層にロームブロックを多く含む。



▲ SK-76完掘状態（北から）



▲ 土層断面（東から）



▲ SK-76完掘状態（北から）



▲ 土層断面（北から）

## SX-20

調査区北東、LL-48グリッドに位置し、II層上面に於いて確認された。遺存状態は良好。

プラン検出時は、平面形状より土坑状遺構と断定せず、特殊遺構扱いで調査を進めた。半掘、完掘の結果、形状は長軸を南北方向に持つ長方形を呈し、長軸3m・短軸0.9m・確認面からの深さ0.5mを測り、ほぼ垂直に立ち上がる壁と、平坦でほぼ長方形の底面を有する土坑跡と考えられる。覆土は黒褐色土主体の自然堆積層である。下層はII層・ロームブロックを含みしまりが強く、上層は微量の表土層が確認された。

## SX-22

調査区北東、LM-51グリッドに位置し、II層上面に於いて確認された。南西隅は小穴による攪乱をうけている。

SX-20と同じく、特殊遺構扱いにて調査した結果、形状は、長軸を南北方向に持ち、ほぼ長方形を呈す。長軸2.9m・短軸0.9m・確認面からの深さ0.35mを測る土坑跡と考えられる。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、底面は平坦でほぼ長方形をしている。覆土は、黒褐色土を主体とする自然堆積層である。

遺構の性格を明らかにする出土遺物はないため、SX-20や周りに検出された同形状の遺構を含め、今後の検討を要する。



▲ SX-22完掘状態（東から）



▲ 土層断面（東から）

## SK-189

調査区北東、LQ-51グリッドに位置し、II層上面に於いて確認された。北側1/3を溝状の擾乱により壊されていた。

形状は直径1.1m・確認面からの深さ0.4mを測る円形状の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で円形をしている。覆土は基本的に2層に分かれ、上層は暗褐色土主体で、確認面近くでは少量の表土層が混じる。下層は黒褐色土主体である。ともに自然堆積層である。

確認位置の東側約25mにSF-1が南北に走っており、周辺に同形状の土坑が数基確認されている。



▲ SK-189完掘状態 (南から)



▲ 土層断面 (南から)

## SK-210

調査区北東、LJ-52グリッドに位置し、II層上面に於いて確認された。遺存状態は良好である。

形状は直径1.2m・確認面からの深さ0.35mを測る円形状の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央やや東寄りに小穴状の盛り込みがある以外は、平坦で円形である。覆土は大別すると2層に分けられ、上層は黒褐色土に微量の表土層が混入している。下層は細分すると3層に分かれるが、主体土は黒褐色土である。  
(小林定之)



▲ SK-210完掘状態 (東から)



◀ 土層断面 (東から)

## 出土遺物



S=1/4

S=1/2



## あ と が き

平成6年度の調査は、平成5年度調査の1区に続いて、2区を調査した。全調査対象面積6.7ヘクタールの内2.25ヘクタールを実施し、平成5年度の調査面積0.9ヘクタールと合わせて3.15ヘクタールになり、本調査区のほぼ半分を調査したことになった。また全調査区の北東部分と南東部分の調査が行われたことから、本調査区に分布する遺構のおおよその特徴と傾向を把握することができた。

旧石器時代の調査は、9×9mの調査坑を16ヶ所設定し、総調査面積2,007㎡を実施したが、その結果、調査区の北側を中心に、尖頭器、ナイフ形石器、剥片等が出土している。周辺の武蔵台遺跡、日影山遺跡、多喜窪遺跡との有機的な関連の中で営まれた遺跡であろう。

日影山遺跡の南端に位置する本調査区に、縄文時代の遺構がどのように分布するかを確認することは、調査の目的の一つであった。縄文中期の遺構は、II層上面から集石、隅丸方形土坑が主であり、住居跡は検出されなかったが、III層上面から縄文早期の稲荷原式土器を伴う住居跡1軒と、住居跡と確定はできないものの住居跡と考えられる土坑が、2区の北寄りで見出された。同じ面から隅丸方形の陥し穴13基が2区全体に分布していることが確認された。陥し穴の低面中央に設けられた数個のピットを、陥し穴全体で断ち割ってみると、ピットの深さ及びピットに埋めたと考えられる杭の太さ等から、多くの知見を得ることができ、貴重であった。平成5年度に調査した1区からもこのような縄文早期の遺構が検出されており、当該期の遺構は本調査区の北寄りに集中していることが伺える。2区の北側に続く4区の調査が来年度以降実施されれば、更に資料が増加することが予想される。本調査区北側の野川の解析谷に面する武蔵野段丘面に広がる縄文早期遺跡の貴重な資料が明らかになるであろう。

本調査に先立って行われた試掘調査で確認された推定東山道の調査は、2区のほぼ東端で見出された。遺構は2区と東側の調査区外にまたがっており、2区北東部で遺構の西半分の100m、南東部角の同じく西半分の約100mを調査した。中間部分は既存の野球場造成による削平工事で消失しているが、推定東山道の西側の溝2本と一部に路面の硬質部分が検出されており、来年度以降に予定されている4区の調査で北へ伸びる部分と、本調査区外に続く東側地区の発掘調査によって、推定東山道の東側の溝が確認されれば、本遺構の全体像を知ることができよう。本調査区の西に近接して南北に通る中世の旧鎌倉街道の調査も行われており、この地域を通る古代・中世の幹線道路の遺構が明らかにできることは、大変貴重な資料である。

本調査の目的の一つに挙げられている武蔵国分寺外郭集落の北への広がりの確認については、2区から奈良平安時代の住居跡は検出されなかったが、円形及び方形の土坑が多く検出され、集落の北側周辺に於ける当該期の土地利用を示す資料として貴重であった。来年度行われる予定の3区における遺構の分布がどのようになるか、期待される所である。

(持田友宏)

西園分寺地区遺跡調査会組織名簿

会 長	柴崎 正次	東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財副参事 (平成7年4月就任)
	秦 正博	東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財副参事 (平成7年3月退任)
副 会 長	岡村 豊	国分寺市教育委員会文化財課長 (平成7年4月就任)
	天野 稔	国分寺市教育委員会文化財課長 (平成7年3月退任)
理 事	坂詰 秀一	東京都文化財保護審議会委員 (立正大学教授)
	永峯 光一	東京都文化財保護審議会委員 (国学院大学教授)
	藤間 泰助	国分寺市文化財保護審議会委員
	清水 文夫	東京都住宅局建設部推進課副参事
	林部 稜幸	東京都住宅供給公社事業部開発室事業開発担当課長
	永田 晃	住宅都市整備公団東京支社住宅事業一部企画用地課長
	吉永 文夫	国分寺市開発第二部事業推進課長
監 事	本藤 圭孝	東京都住宅局建設部推進課開発係長
	佐々木徳明	国分寺市開発第二部開発業務課長

事 務 局

事務局 長	和田 利昭	調査会職員
事務局 員	夏目みね子	調査会職員

調 査 団

団 長	坂詰 秀一	立正大学教授
顧 門	永峯 光一	国学院大学教授
顧 門	吉田 格	国分寺市遺跡調査会団長
参 与	持田 友宏	調査会職員
参 与	早川 泉	東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員
主任調査員	板野 晋鏡	調査会職員
調 査 員	滝島 和子	国分寺市教育委員会嘱託職員 (平成6年9月退任)
調査補助員	小林 定之	調査会職員
調査補助員	伊藤 俊治	調査会職員 (平成6年11月就任)
発掘作業員	熊田悟 円谷猛 月村桂子 久保木京子 高浜誠也 広沢章満 田倉雅実 雪江吉照	
整理作業員	渡辺淳子 兼光育美 司東順香 永丘朋子 田口直美 畑守みどり 戸塚美枝子	

発掘参加者 (順不同)

秋池勝利 秋田裕子 秋山弘 西宮武富 新井忍 新井利延 荒川寛高 海老沢一人 山腰淳一  
 飯島明美 石懸隆行 石田倫子 磯部太平 伊藤貴之 伊藤信男 稲垣浩 井上崇嗣 水野陽介  
 井上富裕 井上善幸 岩田輝穂 岩淵剛 岩本重規 岩元隆博 中川洋美 吉澤賢豪 村木眞弓  
 上原正次 内田芳文 梅田義光 江口朋子 江崎明男 江原晶子 大井史 大田昌興 平賀義則  
 遠藤清登 近江幸子 大淵志津 岡部智子 小川隆章 桶田弘子 邱智鳳 龜山靖人 藤森賢治  
 尾崎繁春 尾崎由美子 小田倉麻子 小原美智丸 甲斐文治 鴨志田静男 木村裕昭 水澤丈志  
 川上啓 鬼鳴ちあき 岸本晃彦 木下純芳 荒井晋 久保田幸一 小出圭一 斎藤貴 村松弘二  
 児玉紀子 小林智之 小畑通成 小松伸行 小松一 小森貴史 小山正利 佐藤真弓 水越和也  
 清水洋行 下山和實 杉浦健治 鈴木一江 山崎泰志 古屋真司 岩岡夢 米光輝一 弘永真一  
 関口良平 高橋岩夫 高橋修二 高橋はるみ 高橋洋子 瀧澤大我 竹内康 橋樹吉 三島百合  
 田中早苗 塚田達也 柳柳勇喜 土田方正 寺井重雄 寺内聖治 山本步 山本英司 三島丈英  
 渡具知喜史 得能良介 富田朋広 友寄英治 外山浩二 内藤博隆 森良子 澤幡薫 藤井茂男  
 長崎稔 中原淳治 中村直明 西脇尚人 野崎卓也 野田定男 東千春 堀部祐紀子 藤本修一  
 日高みはる 山田進 吉田暁 吉本敏夫 矢野悦子 本多聡 丸山りえ 村上美由紀 森実裕文  
 吉塚由香 水村步 岩田亮 山岡夕希子 山陰みどり 疋田佐知子 寺原千恵子 鳥倉千絵子  
 前花恵 須賀きみ子 金子健一

## 報告書抄録

ふりがな	むさしこくふんじあとはくせいちくのいせき							
書名	武蔵国分寺跡北西地区の遺跡							
副書名	西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）住宅市街地総合整備事業に伴う平成6年度発掘調査概報							
編著者名	柴崎正次・坂詰秀一・持田友宏・板野晋雄・伊藤俊治・小林定之							
編集機関	西国分寺地区遺跡調査会							
所在地	〒185 東京都国分寺市泉町2丁目1番地 TEL 0423 (25) 1767							
発行年月日	1995年4月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
むさしこくふんじ 武蔵国分寺 あとはくせいちく 跡北西地区	とほろび 東京都 こくぶんじ 国分寺市 いずみ 泉町2-1	13214	No.19	35°41'08"	139°28'04"	平成6年4月1日 — 平成7年3月31日	22,520.64㎡	西国分寺地区 住宅市街地総 合整備事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
むさしこくふんじ 武蔵国分寺 あとはくせいちく 跡北西地区	集落跡	奈良平安時代		道路状遺構 土坑 溝跡			推定古代東山道武蔵路跡	
		縄文時代		竪穴住居跡 集石跡 土坑		縄文土器 石器	燕系文様式期の住居跡 陥し穴13基	
		旧石器時代				尖頭器 ナイフ形石器		

---

---

**武蔵国分寺跡北西地区の遺跡**

西国分寺地区 (旧国鉄中央鉄道学園西側跡地)

住宅市街地総合整備事業に伴う

平成6年度発掘調査概報

平成7年4月20日

編集 西国分寺地区遺跡調査団

発行 西国分寺地区遺跡調査会  
東京都国分寺市泉町2-1

☎ 0423-25-1767

印刷 有限会社栄光社

---

---